ぼくのねこ ポー

ぼくのねこポーを読んで

3年　W・Nさん

わたしは犬をかっています。この本を読んで、もしもうちの犬がいなくなってしまったらと考えました。うちの犬は人がすきなのでしらない人でもついていってしまいそうです。ねこの「トム」を心ぱいしてさがしていた森くんのかなしい気持ちがよく分かりました。

はんたいに、谷山くんの気持ちもよく分かりました。大切な「ポー」が転校生の森くんのねこだと分かった時、すぐに返すことができませんでした。谷山くんは「ポー」のことが大すきになってしまったので、ふあんな気持ちでくるしくなってしまいます。ある日、谷山くんは「ポー」のせなかをなでながら、「ポー」と何度も名前をよびます。その後、谷山くんはなみだをながしました。（そしたら、なみだがつるつると出てきた）わたしはこのつるつるとしたなみだとは何だろうと考えました。谷山くんはそのつぎに小さい声で「トム」とよびかけます。このなみだはかなしいなみだではなくて、はじめて「ポー」の気持ちを考えて出てきたつるつるのとくべつなみだなのだと思いました。

物語が進んでいくとわたしは、谷山くんの気持ちはでこぼこだなと思いました。うれしかったり、どきどきしてくるしかったり大いそがしでした。そんな谷山くんが「ポー」の気持ちを考えて行動したあと、「ポー」とはなれることになってしまいました。けれど、谷山くんは晴れ晴れした気持ちになったとかんじました。自分いがいの人の気持ちを考えて行動することは、とても大切なことだと思いました。

このお話で一番よかったなと思うところは、さいごに谷山くんが言った、

「トム、よかったね」

というところです。谷山くんのせい長したやさしい気持ちがよくつたわってきて、とてもあたたかい気持ちになりました。